



国立健康危機管理研究機構

国際医療協力局

JIHS Bureau of Global Health Cooperation

明日の国際保健医療協力 magazine

# NEWSLETTER

vol.22  
2025



## JIHS 始動

健康危機に挑む

国際医療協力局の次なる一歩



2025年4月1日、国立健康危機管理研究機構（Japan Institute for Health Security: JIHS[ジース]）が、国立感染症研究所（NIID）と国立国際医療研究センター（NCGM）の統合によって設立されました。今号は、健康危機に挑む国際医療協力局の新たな一歩についてお伝えします。



# HELLO, JIHS

新しい機構 JIHS を紹介します

JIHS は、政府に科学的知見を提供する新たな専門家組織として、感染症等の情報分析・研究・危機対応、人材育成、国際協力、医療の提供等を一体的・包括的にを行います。

\*国際医療協力局のミッション、組織体制は JIHS になっても変わりません（英文名称は Bureau of Global Health Cooperation に変更となりました）。

## MISSION

## JIHS のミッション

感染症をはじめとする健康危機に対して安心できる社会を実現する

## VISION

## JIHS のビジョン

世界トップレベルの感染症対策を牽引する「感染症総合サイエンスセンター」として、基礎、臨床、疫学、公衆衛生にわたるすべての領域研究を統合的に推進し、最先端の医療と公衆衛生対策を提供する

## CORE VALUE

## JIHS のコアバリュー

**Global** 常に世界的な視野 | **Resilient** 強くしなやか | **Innovative** 革新的に  
**Integrity** 公正かつ誠実 | **Professional** 高度な専門性

## FOUR FUNCTIONS

## JIHS の 4 つの機能

### 1

#### 情報収集・分析・リスク評価機能

##### Disease Intelligence

サーベイランスや情報収集・分析の実績、国内外の関係機関との協働・連携により、感染症インテリジェンスにおけるハブとしての役割を担います。科学的知見を政府に迅速に提供するとともに、国民に分かりやすい情報提供を行っていきます。

### 2

#### 研究・開発機能

##### Research, Development and Innovation

平時より世界トップレベルの研究体制を確保し、基礎研究、シーズ開発から臨床試験まで戦略的に進められる組織を目指します。感染症危機の際には、国内外の機関等と連携し、臨床試験を含め研究開発のネットワークハブとして迅速に対応します。

### 3

#### 臨床機能

##### Comprehensive Medical Care

感染症危機に JIHS の持つ機能を十分に発揮するためには、高度な臨床能力が不可欠です。そのため、国立国際医療研究センターが担ってきた総合病院機能を引き続き備え、さらに高めていくことにより、人々の健康を守ります。

### 4

#### 人材育成・国際協力機能

##### Human Resource Development, International Cooperation

産官学連携や国際的な人事交流などを通して、医療従事者・研究者・公衆衛生実務者など多様な専門家の育成・確保に努めます。また、グローバルヘルスに貢献する国際協力を進めていきます。

## CONTENTS

### 3 HELLO, 新しい機構 JIHS を紹介します

#### Special Interview

### 4 JIHS 始動

#### 健康危機に挑む国際医療協力局の次なる一歩

蜂矢 正彦 | 医師・JIHS 国際医療協力局 運営企画部長

<インタビュー>

河野 憲治 | JIHS 広報管理部長・元 NHK「ニュースウオッチ9」キャスター

#### 研究論文紹介

### 12 ザンビア共和国におけるコレラアウトブレイク対応の知見が論文になりました

### 13 国際医療協力局 OB/OG のいま 明石 秀親 | 医師・元 国際医療協力局 運営企画部長

### 14 国際医療協力局 GLOBAL PROJECT MAP

### 16 世界の味さんぽ セネガル共和国の家庭料理 マフェ

新たに JIHS に変わってから初めての NEWSLETTER です。これからも“ゆる〜くわかりやすく”をモットーに、グローバルヘルスをお伝えしていきます。よろしくお願ひします！



グローバルヘルス案内人 ハチP

## JIHS 始動

### 健康危機に挑む国際医療協力局の次なる一步



蜂矢 正彦

医師（専門分野：ワクチン予防可能疾患、感染症疫学、小児科学）、  
国立健康危機管理研究機構（JIHS）  
国際医療協力局 運営企画部長

河野 憲治 [インタビュアー]

国立健康危機管理研究機構（JIHS）  
広報管理部長  
元 NHK「ニュースウオッチ9」  
キャスター

2025年4月、国立健康危機管理研究機構（JIHS）が発足。新組織の中で、これから国際医療協力局の活動はどのように進化していくのでしょうか。JIHS 広報管理部長に就任した河野憲治さんが、国際保健医療協力の豊富な活動経験を持つ蜂矢正彦医師に、キャリアの歩みとともに今後の国際医療協力局に求められる役割や展望について聞きました。

#### Profile

##### 蜂矢 正彦（はちやまさひこ）

JIHS 国際医療協力局 運営企画部長。1989年 東邦大学医学部卒業。医学博士、公衆衛生学修士。小児科医として病院勤務を経て、2006年入局。アジア、アフリカなど約20カ国で感染症対策、ワクチン予防可能疾患対策、疫学研究などに従事。

##### 河野憲治（こうのけんじ）

JIHS 広報管理部長。元 NHK「ニュースウオッチ9」キャスター。1986年 NHK 入局。約20年間、アメリカ、イランなどの海外支局にも駐在し、当時のオバマ米大統領やハタミ・イラン大統領などとも単独会見。ニューヨークにて NHK アメリカ総局長を務め、アメリカ、南北米諸国、NY 国連本部などの報道を担当。2025年4月より現職。

## “一番困っている人のために”を原点に歩み始めた 国際保健医療協力の道

**河野** 国際医療協力局は NCGM（国立国際医療研究センター）での39年間を経て、JIHS 国際医療協力局に変わりました。まず、読者のために主な活動について紹介していただけますか？

**蜂矢** 国際医療協力局は、世界の健康課題の解決、特に低・中所得国の医療や保健衛生の向上のために活動している部門です。医師・看護師・公衆衛生専門家などの派遣や研修員の受け入れなどを通じて、JICA（国際協力機構）の技術協力プロジェクトをはじめ、人材育成、研究、健康危機に対する緊急援助など、様々な活動をしています。今は約60名が在籍していて、世界各地を歩き来しながら仕事をしています。具体的な分野としては、感染症対策、母子保健、保健医療人材の育成、医療の質向上、UHC（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）推進など、多岐にわたります。

**河野** 活動について詳しく聞いていきたいのですが、その前に蜂矢さんがどのようなきっかけで国際保健医療協力の仕事をすることになったのか聞かせてください。

**蜂矢** かなり遡りますが、もともとは小児科医として複数の病院で勤務していました。学生時代は「社会に出るなら一番困っている人のために働けたらいいな」という漠然とした想いがあったのですが、病院で忙しい日々を送る中でその気持ちを忘れていました。ちょうどその頃、仕事を通じてある著名な小児科の研究者に出会いました。そして後日、その先生が転身してネパールの地方都市で学校保健に取り組んでいるという新聞記事を見

たのです。「尊敬するサイエンティストの先生がネパールに!？」と気になって、休暇を利用して現地に会いに行きました。

ネパールでは先生が小学校の横にある診療所で生き生きと、子どもたちやその親御さんたちの健康を守る仕事をされていました。その様子を見ながら、ふと「そういえば自分もこういう仕事をしたかったのではないかな」と思い出したんです。

**河野** それをきっかけに蜂矢さんも転身したのですね。

**蜂矢** はい。そこから本格的に国際保健医療協力の道に進もうと思い、動き始めました。でも当時はこの分野で働きたくても、人脈がないとなかなかきっかけが作れない時代。どうしようかと悩んでいたところ、モンゴルの

## UHC

KEY  
WORD  
1

UHCとは、Universal Health Coverage（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）の略で、「すべての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」のこと。国際社会は、持続可能な開発目標（SDGs）の一環として、2030年までに UHC 達成に向けて取り組むことを約束しています。

予防接種プロジェクト関連で来日していたモンゴル人保健医療関係者の送別会が都内の焼肉店で開かれるという情報を聞きつけました。思い立って、その場に駆けつけて「乾杯！」って声をかけてお話をさせてもらいました（笑）。そのご縁からプロジェクトに参加できることになったんです。

**河野** それはすごい（笑）。初めてプロジェクトに参加してみて、どうでしたか？

**蜂矢** 自分が臨床での予防接種しか分かっていなかったことに気づきました。臨床では一

人ひとりの患者さんにワクチンを接種するという“点”の医療を考えていけばいいわけですが、モンゴルで求められているのは国内の予防接種率を底上げするという“面”の取り組みです。その“点”と“面”の違いに戸惑い、もっと勉強しなければと実感しました。

そこで渡米してハーバード大学で疫学や公衆衛生について学びました。学内で知り合った日本人研究員の方に留学後のキャリアについて相談したところ、国際医療協力局を勧められ、2006年に入局しました。

## 宗教・文化の壁や保健人材不足 — 困難な現場で見つけたやりがい

**河野** 国際医療協力局ではどのような仕事をしてきたのでしょうか？

**蜂矢** 最初の2年間は中国に行き、予防接種プロジェクトに取り組みました。以降は、ラオス、ミャンマー、ザンビアでのHIVなどの感染症対策や研究、コンゴ民主共和国でのエボラ出血熱の緊急援助など、様々な活動をしてきました。局の広報を担当していた期間もあり、原宿のイベントスペースを借り切って「アフリカ料理を食べながら世界の健康課題を考えよう！」というようなイベントを企画したこともあります。院内感染予防の研修やフランス語圏アフリカ諸国を対象にした母子保健研修などにも携わりました。

**河野** 印象に残っている活動はありますか？

**蜂矢** パキスタンでの活動は印象に残っていますね。2006年から5年間、アフガニスタンとの国境地帯に位置するスワート県、シャングラ県、ブネール県で、保健省と州保健局

と連携して、乳幼児が予防接種を受けられるようにするJICAプロジェクトが実施されていました。パキスタンはイスラム教の国なので、女性たちが保健センターに赤ちゃんを連れて行っても予防接種を受けさせることができない状況がありました。パキスタン政府自体は予防接種に力を入れていたので、「EPIテクニシャン」と呼ばれる予防接種だけを行う専門スタッフが保健センターに配置されていたのですが、全員男性だったのです。

**河野** 予防接種をするのも女性でなくてはならないということですか？

**蜂矢** はい。男性が女性に触れることがタブーな社会です。ましてや私たち外国人は医師でも女性と目を合わせてはいけなし、同じ空間にいることも許されない状況でした。

そこで関係者と協議し、レディヘルスワーカー（LHW）と呼ばれる女性の保健スタッフに活躍してもらうことにしました。LHW



◀ 1. パキスタンで外国人テロを警戒しながら村を歩く蜂矢さん（右から3番目）  
2. パキスタンのレディヘルスワーカーたち  
3. ラオス南部で予防接種の調査を行う蜂矢さん（左から2番目）  
4. 中国四川省で医師にアドバイスする蜂矢さん（左から2番目）

は家族計画や栄養などの指導を行う職種で、識字率が低い地域にいなから字が読めるという選ばれた人たちです。最初に3県で、LHWに予防接種のやり方を指導しました。バイアルに溶解液を入れてワクチンを溶かし、それを注射針で吸って打つという手順を一つひとつ教えることで、予防接種を受けられる赤ちゃんを増やすことができました。

でもこの取り組みを定着させようとした時、パキスタン・タリバンの活動が激しくなってきたため日本人専門家に退避命令が出てしまい、残念ながら断念せざるを得ませんでした。そこで比較的安全で近隣に位置するハリプール県に活動拠点を移しました。ハリプール県ではJICA専門家の皆さんが予防接種率アップの成果をしっかりと出せましたが、他県への“面”の展開を中断したという悔しさの残る経験として印象に残っています。

**河野** 低・中所得国の現場に行ってみると、

日本や欧米の先進国の基準は適用されないとか、宗教や慣習の違いなど色々な問題があって、時にうまくいかないことが起こるのが現実なのでしょうね。現地で活動する上で様々な障壁や、身の危険を感じる場面なども多々あるのだらうと想像しますが、この仕事を長く続けているのはなぜでしょうか？

**蜂矢** それはやはりこの仕事が面白いからです。本当に面白いですよ。そもそも小児科医になったのも、きちんと診断・治療することで患者さんのコンディションが劇的に改善するところが好きだったからです。公衆衛生には同じように、課題に対応した取り組みがダイレクトに反映されるという共通点があるのです。私が取り組んだことが相手国の保健医療の改善に影響を及ぼすことができる。だから頑張れば頑張っただけのやりがいがありますし、意義のある仕事に携わることができることが、この仕事が楽しいと感じるところです。

## 健康危機に備えるために — PPRR を軸に進化する活動

**河野** 現在、国際医療協力局ではどのようなプロジェクトが展開されているのですか？

**蜂矢** 病院の運営管理、非感染症対策、医療従事者の国家資格制度の整備など、様々な JICA 技術協力プロジェクトを継続的に展開しています。また、保健省アドバイザーとして、相手国の保健政策全般について政府関係者にアドバイスを行う専門家が、ラオス、カンボジア、セネガルで活動しています。

**河野** グローバルに継続的に活動する中で、重点的に取り組む課題も変わっていくのでしょうか？

**蜂矢** はい。近年の低・中所得国では、感染症に加えて非感染症疾患で亡くなる人が増えるという「二重の負荷（ダブルバーデン）」が大きな課題になってきています。そうした時代とともに変わる健康課題に私たちも対応していく必要がありますので、毎年、保健課題を包括的に扱う3つの大きな国際会議（1月開催のWHO（世界保健機関）執行理事会、5月開催のWHO世界保健総会、10月開催のWHO西太平洋地域委員会）に出席して保健医療の動向を把握しています。これらの会合を通じて世界の保健医療の潮流を一望できますし、様々な国際的な機関や研究者と協働するきっかけになったりします。

**河野** 健康課題へのニーズも変化する中、JIHS になった国際医療協力局はどう変わっていくのでしょうか？

**蜂矢** 健康危機への対応は UHC が達成できていることが重要な要素になりますから、これまで通りグローバルな UHC 達成に向けて

目の前の活動を着実に進めることが大前提になります。その上で私は局の役割も業務の幅もさらに広がると考えています。局員も「健康危機に対応する上で、この活動はどんな意味を持つのか」という視点をより意識するようになっていきます。

健康危機への対応に関して“PPRR”というキーワードはご存知でしょうか？ PPRR は「Prevention（予防）」「Preparedness（準備）」「Response（対応）」「Recovery（復旧）」の頭文字で、健康危機のリスク管理と対応能力の重要なフェーズを示したものです。この4つのフェーズを循環することによって、リスクを最小限に抑え、効果的な対応と迅速な復旧に取り組みます。

このうち最初の3つの“PPR”は、2009年の新型インフルエンザ流行以降によく聞くようになったのですが、国際医療協力局ではこれに加えて4つ目の“R”（復旧）を以前から

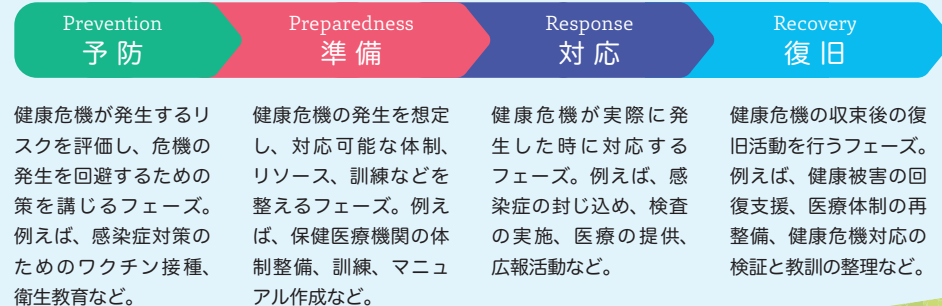
KEY  
WORD  
2

### PPRR

健康危機対応の重要フェーズ



PPRR は、健康危機対応における予防・準備・対応・復旧という4つの重要なフェーズのこと。4つのフェーズを循環させることで、リスクを最小限に抑え、効果的な対応と迅速な復旧に取り組み、さらに次の健康危機への対応力（レジリエンス）を高めます。



活動において重視してきました。

これまでのカンボジアやコンゴ民主共和国での保健医療サービスの改善や人材育成の仕組みづくりなども“R”（復旧）までを支援する活動でしたし、東日本大震災後に10年間ほど続けた宮城県東松島市の復興支援もそうです。JIHSの一員としても、国際医療協力局はPPRRを推進する集団として、活動に取り組んでいきます。

**河野** PPRRを重視した健康危機対応を軸に、これまでに実績のある活動をさらに拡充していくということですね。

**蜂矢** そうですね。加えて、JIHS全体にも活動から得られた知見を還元していきます。例えば昨年、政府は感染症による健康危機が発生した際のガイドラインとして「新型インフルエンザ等対策政府行動指針」を策定しましたが、この指針の中で人材育成と国際連携の分野に関しては、私たちが貢献できることも多いと考えています。

**河野** 新たに始まる活動もありますか？

**蜂矢** はい。まだ構想段階ですが、国内で健康危機のフロントラインに立つ方や政策を作る方などに、低・中所得国の現場を私たちと一緒に経験する機会を研修プログラムとして提供できたらと考えています。

私自身、低・中所得国での現場経験は、日本国内で健康危機に対応する際にとっても役立つことを実感しています。健康危機が起きた時には、予算や人手、情報、システム、電気・水などのインフラがないというリソースの限られた環境で、平時よりも柔軟な対応力が求められます。日本の病院の救急医療の現場でテキパキと仕事をしてきた人でも、海外の緊急援助の現場では同じように対応できるとは限りません。様々な制約の中で最大限の対応が求められる国際保健医療協力の現場を、平時から経験して理解することは、きっと日本の健康危機対応の際に生きるだろうと考えています。

## 強みは政策から現場までカバーする 幅広い活動で培う実践力



▲ フィジー出張から帰国したばかりの蜂矢さん。インタビューにはフィジーの正装のシャツで登場

**河野** 国内外に国際協力を行う機関・団体は多くありますが、国際医療協力局の独自性や魅力はどういった点にありますか？

**蜂矢** 一番の強みは、扱う国際協力案件が突出して多い組織であることです。常時10件くらいのJICA技術協力プロジェクトに加えて、細かい案件を入れると100以上の案件に関わっています。それだけ幅広い経験ができる組織は国内では見当たらないのではないかと思います。また、国の政策に関わるトップレベルの活動とフィールドでの活動の両方を経験できる環境であることも本当に貴重だと思います。

それから多様な考えと経験を持つ、個性的で面白い局員たちがたくさんいます。活動を通じて世界中の色々な食生活、美味しいものを楽しむことも魅力の一つですね。もちろん美味しくもないものも含めて何でも食べるんですけどね(笑)。余談ですが、ブータンに行った時は野菜が唐辛子しかなくて、初日から2週間、唐辛子をチーズで煮込んだ料理とご飯を食べ続けました(笑)。

**河野** 面白い人たちと美味しいものに出会えるのはいいですね(笑)。国際医療協力局のさらなる発展に向けて、どのような仲間を求めていますか？

**蜂矢** 国際機関や低・中所得国での活動経験があるような即戦力になる人も求めています。同時に若手で経験は少ないけれど成長意欲のある人も求めています。局内では、若手局員にチームリーダーとして活躍してもらえる場も増えています。また医療従事者以外の方も政策や研究の分野で活躍しています。世界の健康課題の解決のために何かしたいという想いを持った人であれば、一緒に活動しましょうと訴えていきたいですね。



(写真はイメージです)

蜂矢さんがブータンで食べていたのは、国民食とも言われる「エマダツイ」。たっぷりの唐辛子とチーズを煮込んだ料理。とっても辛かったです！

## 日本の健康危機対応力の強化を目指して

**蜂矢** 逆に質問させてください。国際ジャーナリストでもある河野さんから見て、国際医療協力局にどのような進化を期待しますか？

**河野** そうですね。蜂矢さんのように低・中所得国で働いたことのある人たちは、物事が日本と同じようには進まない中でも苛立ちたりせず、大らかで忍耐強くなるイメージがあります。そういう人柄の良さを知ってもらうことで国際医療協力局に興味を持つ人がより増えるのではないかと思います。難しい話ではなくて、低・中所得国の保健医療を良くしたいという志を高く持つ、面白い人がいっぱいそうだなと思ってもらえたら、また新たな面白い人が集まってくるのではないのでしょうか。

それから「国」という視点からも、やはり国際協力はなくてはならない活動だと思っています。ワクチンにしても、感染症は国境を越えて広がるわけですから先進国だけが接種できればいいわけじゃない。今、世界情勢に不安要素が多い中で、特にアメリカのトランプ政権が海外援助を大幅に削減しようとしているだけに、日本が継続して国際保健医療協力に取り組む意義は大きいのではないかと思います。それが広い意味で外交の力にもなるし、国際社会で日本の信頼を高めることにもなるのではないのでしょうか。だから国際医療



▲元キャスターの落ち着いた語り口で、場を和ませながら核心を丁寧に引き出す河野さん

協力局には、これからも世界での日本の信頼度アップにつながる素晴らしい活動をしてほしいと感じています。

**蜂矢** ありがとうございます。私たちには国や国民からそうした期待があることを改めて認識しています。フィールドにいと目の前の課題に意識が向かいがちですが、日本の皆さんに広く説明責任を果たすことはとても重要です。そのためにも局員が同じ方向を向いて、蓄積した知見や専門性、科学的視点を活かしつつ、グローバルに日本の健康危機対応力をより一層向上できるように努力していきたいと思っています。



## 研究論文紹介

### ザンビア共和国における コレラアウトブレイク対応の知見が 論文になりました



JIHS 国際医療協力局  
法月正太郎 医師



▼論文はこちらから閲覧できます  
<https://mjz.co.zm/index.php/mjz/article/view/633>

国際医療協力局の法月正太郎医師とザンビア共和国の保健医療関係者の共著による論文「*Decentralized vs. Centralized Cholera Treatment Strategies in Zambia's 2023–2024 Outbreak* (ザンビアの2023～2024年コレラアウトブレイクにおける分散型対集中型治療戦略)」を紹介いたします。この論文は、*Medical Journal of Zambia* 誌 Vol. 52 No. 3 (2025年6月発行)に掲載されました。

#### ❖ 背景のできごと

2023年10月、ザンビア共和国の首都ルサカ市でその年最初のコレラ患者が確認され、アウトブレイク(集団感染)に発展。当時、法月医師は2021年よりザンビアに駐在し、「JICA ルサカ郡病院運営管理能力強化プロジェクト」に取り組んでいました。法月医師は、コレラの感染拡大を見据えて、病院やコミュニティをまわりながら感染対策を行いました。アウトブレイクは2024年1月にピークを迎えた後、ザンビア政府の対応も奏功し、次第に収束。感染者数は約23,000人、死亡者数は約740人(2024年5月12日時点)に上り、ザンビア史上最悪のコレラアウトブレイクとなりました。

#### ❖ 論文の概要

論文は、コレラアウトブレイク対応の中で得られた知見を研究結果としてまとめたものです。コレラ治療において求められた柔軟で段階的な戦略として2つのモデルを解説。1つはアクセスの改善と患者の治療遅延の削減を目的として流行初期に設置された分散型コレラ治療センター(CTC)での対応。もう1つは、医療提供体制の拡充、ケアの標準化、重症患者の管理を目的として流行の最盛期に導入された集中型CTCでの対応です。研究では、これらの2つのモデルでの患者管理と流行抑制における有効性を評価しました。

- ▲(写真上) コレラ治療センターで待機する医療スタッフたち
- ▲(写真下) ザンビアの大統領(右)と対話する法月医師(左)



### 京都の美術短大の 学生になって 日本画を学びました

明石 秀親 | 医師・元国際医療協力局 運営企画部長

2023年3月に国立国際医療研究センター(現JIHS)国際医療協力局を退官した明石さん。退官後は客員研究員として国際保健にも携わりつつ、京都で美術短大生になりました。「人生は一度きり。『あれをやっておけばよかったなあ』と後悔するより、定年後のまだ若いうちにやってみよう」と思ったのがきっかけだそうです。

2年間、日本画を基礎から学び、2025年3月に卒業。その集大成となる卒業制作の作品は「洛中洛外図—東変木乙本一」。金箔の二隻一對の大画面に京都の名所や縁の人物を描きました。

異色に見える轉身も、アートという新しい分野に踏み出して、「これまで以上に国際保健医療協力を何か新しい方法で貢献できないかと模索中」とのことです。



▲日本画「洛中洛外図—東変木乙本一」は、大阪市内のアートイベントで京阪中之島駅構内にも展示されました

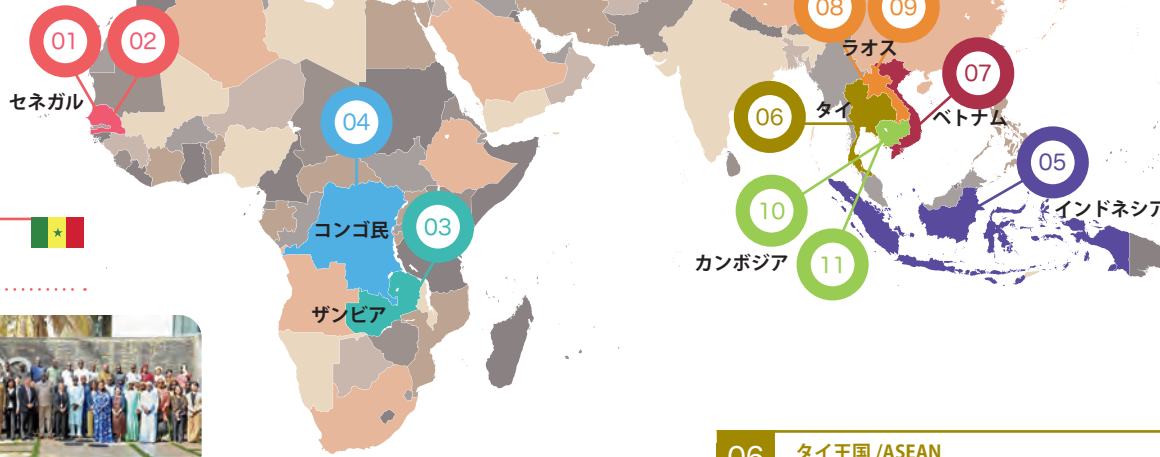


▲作品の中には京都の風景や人々がたくさん描かれています

◀明石さんが卒業制作で描いた日本画「洛中洛外図—東変木乙本一」(2025/ 絵画/高知麻紙、岩絵具、洋金箔、胡粉、水干絵具、墨)

# GLOBAL PROJECT MAP

8 カ国 11 案件  
(国際協力機構 (JICA) 案件)



## 01 セネガル共和国 保健政策アドバイザー

セネガルの保健システムの強化や UHC 達成に向けた技術支援に取り組んでいます。日本の保健医療分野の開発協力の効率的・効果的な推進や、新規の案件形成も支援します。



## 02 セネガル共和国 医療サービスの質改善プロジェクト

セネガル保健社会活動省と連携して、医療サービスの質を高める国家戦略の策定や、地方 2 州 9 病院において安心安全なサービスが提供されるための仕組みづくりに取り組んでいます。



## 03 ザンビア共和国 ルサカ郡総合病院運営管理能力強化プロジェクト

ルサカ郡・州保健局、保健省と連携し、ルサカ郡内の 5 つの病院(チバタ、マテロ、カニヤマ、チャワマ、チレンジェ)の医療サービスの質を高めるために、病院運営の能力強化に取り組んでいます。



## 04 コンゴ民主共和国 感染症疫学サーベイランスシステム強化プロジェクト フェーズ 2

コンゴ民の保健省疾病サーベイランス局とコンゴセントラル州保健局を対象に、感染症の対応や評価を含むサーベイランス制度の強化、アウトブレイク対応に取り組んでいます。



## 05 インドネシア共和国 感染症早期警戒対応能力強化プロジェクト

インドネシアの保健省、東カリマンタン州・南スラウェシ州・バンテン州の州/県市保健局、保健センターで、感染症サーベイランスの強化に取り組んでいます。



## 06 タイ王国/ASEAN 公衆衛生危機管理のための ASEAN 感染症対策センター設立と能力強化支援

ASEAN 域内の公衆衛生危機や新興感染症への準備・探知・対応を行う中核拠点となる ASEAN 感染症対策センター (ACPHEED) の設立と運営開始に向けて、医学/総括/看護学の専門家を派遣し、必要な技術支援や組織調整に取り組んでいます。



## 07 ベトナム社会主義共和国 遠隔技術を活用した医療人材能力向上体制強化プロジェクト

ベトナムの保健省、ラオカイ省保健局/総合病院、ルックイエン地域/イエンビン地域の保健センター・医療施設を対象に、地方における医療サービスの質向上と、遠隔医療を通じた医療人材能力強化に取り組んでいます。



## 08 ラオス人民民主共和国 看護師・助産師继续教育制度整備プロジェクト

ラオスの保健省人材局と保健人材カウンシル/看護助産委員会と連携して、看護師・助産師の继续教育制度の強化に取り組んでいます。



## 09 ラオス人民民主共和国 保健政策アドバイザー

ラオスの保健省が開発パートナーとともに国家保健開発計画を効果的に実施して保健医療分野の改革を推進できるように支援しています。



## 10 カンボジア王国 非感染性疾患対策プロジェクト

カンボジア保健省とコンポンチャム州保健局、郡保健局、州・郡の病院と連携して高血圧・糖尿病、子宮頸がん対策能力の強化に取り組んでいます。



## 11 カンボジア王国 UHC 達成に向けた保健政策アドバイザー

カンボジア政府に対し、UHC 達成に向けた保健財政・健康保険や保健人材育成などの政策・制度・戦略計画に関する政策的・技術的助言や支援を行っています。



2025 年 8 月 1 日時点



セネガル共和国の  
家庭料理

マフェ

ピーナッツ  
ペーストが  
ポイント!



▲ ジュネーブ出張中の局員がパレ・デ・ナシオン（国連欧州本部）のカフェテリアで注文したマフェのセット。価格(当時)は13スイスフラン(約2,200円程度)。セネガルでは、その10分の1くらいに価格で食べられるそうです。

▲ セネガルに長期滞在した局員が現地食べたマフェ。日本と同じようにお米が主食なのです。



西アフリカのセネガルの伝統的な家庭料理「マフェ」。

チキンやラムなどの肉とトマトなどの野菜を、ピーナッツペーストと一緒に煮込んだシチューです。白米やクスクスにかけると盛り付けは、まるでカレーライスみたい！ピーナッツのコクとトマトの酸味が絶妙にマッチした、濃厚でクリーミーな味わいです。

Web サイト & SNS 更新中!



<ご寄附のお願い>

JIHS 国際医療協力局では、保健医療分野の国際協力活動の充実等を目的とする寄附のご協力を皆さまに広くお願いしております。ご寄附のお申し込みは、下記の連絡先より国際医療協力局 寄附担当までご連絡ください。

NEWSLETTER vol. 22 2025

2025年9月16日発行

国立健康危機管理研究機構 国際医療協力局

Japan Institute for Health Security  
Bureau of Global Health Cooperation

〒162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1

tel: (03)3202-7181 fax: (03)3205-7860

koho@jihs.go.jp

https://kyokuhp.jihs.go.jp

イラスト(ハチP) 井上きみどり

©Japan Institute for Health Security ALL RIGHTS RESERVED.